

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこぼれ話を掲載いたします。

「雨が降りそうだ。傘を持っていこう」と思ったが、（めんどくさい。降らなかつたら、つまらない）とやめた。そうしたら、やはり雨が降りだして、びしょ濡れになってしまった。

このような経験は誰にもあるだろう。しかし、こうしたなんでもないような失敗をどのように処理したであろうか。ある人は「気づいたことは、やはりそのままに実行するのがよいとの教訓だ。たとえ雨が降らずに、「それで傘がかえって邪魔になつたとしても、濡れるよりはましだ」と反省をして、天候のことだけではなく、ほかのことや、仕事のことにも「気づいたことはそのとおりに素直に実行する」ように努めながら、実生活をよりプラスにしている。

うまく運んだときには、どこがよかったのかと研究する。失敗したときには、どこが悪かったのかと検討する。簡単にいえば、思い返して工夫を重ねるといふことだ。つまり反省である。

よくても、悪くても反省である。その時その場にこの反省をする。あるいは夜やすむ前とは、一日のピリオドを打つとき、かならずその日をふり返って、この思い返しをしておく。神仏や親祖先の霊にご挨拶をするときなど、こうした研究や検討の結果



後始末が 前進を生む

丸山竹秋

をご報告するのは尊いことである。

よくいわれる「一件落着」とは、その事件はこれで解決したという意味であろうが、解決したのならどこがうまく運んで、そうなったのか、ポイントだけでもはつきりさせておく。これが解決の、その後始末である。一件落着の研究、検討、つまり反省が、その次の事件に役立つのだ。それを怠っていると、名奉行にはなれない。

一件というのは、かならずしも大事件というわけではない。平凡で、平穏な毎日もある。その中でも新しいことはいくつもあ、些細なことでもうまくいく、あるいは失敗することがあるのだから、それぞれを一件、一件とみていくと、一日には何件もあるだろう。

その一つ一つについて、こうだからこうなったのだと締めくくりをつけておく。それらを抛りどころにして、また明日を迎える。この心がまえが前進につながるのである。うまくいっても、失敗しても、何らの工夫、反省もせず、ボンヤリしているだけでは、後退しかないであろう。年の終わりにあたっては同様だ。

理屈っぽくなれというのではないが、一件あれば反省し、後始末をつけておくのが次の前進を生むのであり、ぼうつとしていれば後退あるのみと知りたい。この一件が、小さいものから大きなものになればなるほど、その研究、検討がしっかりなされるべきである。

『つねに活路あり』より